



解釈のものさしを獲得しよう

初めて教壇に立った奈良県の私立小学校には、オーケストラクラブがありました。

そこで私は弦楽器の指導に携わっており、クラブはめでたく西日本大会で優勝を成し遂げ、文部科学大臣賞も受賞しました。

そこから私は札幌で教壇に立つことになりました。

赴任した先の学校にあったのは、ブラスバンドクラブ。

本当にたまたまですが、そのクラブは東日本大会で幾度も優勝しており、同じく文部科学大臣賞を受賞していたのです。

西の覇者から東の覇者へ。

偶然にもそうした転勤を重ねて、私は去年から愛知県で務めることになったわけです。

そういえば、先日その奈良県の時の教え子から「今度 NHK 交響楽団のヴィオラ奏者になることが決まりました！」という連絡が入りました。

私が教師一年目の時にオーケストラクラブで教えていた子で、その後 5・6 年生で担任もした女の子です。

今では立派な大人になった彼女も、思い出すのは低学年の頃に私の膝に乗ってニコニコと色んなお話をしてくれた姿です。

(今度、SOLAN 小学校にも演奏に来てもらおうと思っているところです。)

他にも、かつての教え子たちはすでに社会に飛び出し、自分の道を力強く歩み出しています。

SOLAN のみんなも、どんな道を歩み、どんな未来を切り開いていくのか、今から本当に楽しみです。

さて、先ほどのオーケストラやブラスバンドのクラブには、共通する練習の「仕組み」がありました。

コーチや先生方がつきっきりで指導しているのではなく、日常の練習風景では上級生が中心となって下級生に教えているのです。

「もう少し楽器を上げてね。」

「ここの音程に気をつけてね。」

「指のポジションはこっちの方がいいよ。」

上級生が、自分の経験をもとに熱心に指導しています。

下級生は習いたてですから、自分の演奏のどこを直せばよいのか、またどうすれば上手に引けるのか、当然分かりません。

が、上級生には全部ではないにしろ、それが見えており、かつ分かっているようです。

「上達」とはつまり、今まで見えなかったことが見えるようになったり、分からなかったことが分かるようになったりすることだといえます。

勉強にも同じことが言えます。

物語や詩を読む時も、解釈の仕方を何も教わっていない状態では、見えないものだらけで終わってしまいます。

「面白かった。」

「つまらなかった。」

などの平べったい感想で終わることも少なくありません。

ですが、解釈の仕方を学んでいくと、今まで見えなかったようなものが見えるようになってきます。

例えば、現在国語で学習している「白い帽子」という物語。

読みを鍛えながら、今はいくつかの解釈のものさしを獲得するべく学びを進めているところです。

最初に教えたものさしは、「登場人物」でした。

一読した後に、

「このお話の登場人物を全て書き出します。」

と指示し、ノートに思いつく限り全ての登場人物を書き出していきました。

- 松井さん
- 女の子
- お客の紳士
- たけのたけおくん
- お母さん

スラスラと出る中で、一つ、子どもたちの意見が分かれたところがありました。

それが、「ちょう」です。

ある子が言いました。

「ちょうは、登場人物ではないと思います。なぜなら、ちょうは人じゃないからです。登場“人物”なんだから、人じゃないとだめだと思います。」

この意見が出たことによって、一気に議論が紛糾しました

クラス全体に立場を問うたところ、賛成と反対がちょうど半々くらい。

ここで、子どもたちは考え始めます。

「登場人物とは何なのか」を、です。

話し合いの中で、議論の潮目を大きく変える意見がでました。

それは、菊池君の意見です。

「ちょうは、登場人物だと思います。人間だけが登場人物になるとは限らないと思います。2年生の時に勉強した『お手紙』っていう話は、がまくんとかえるくんのお話です。二人ともかえるだけど、ちゃんと話もしているし、その二人が登場人物じゃなかったら、あのお話には登場人物がないことになります。だから、ちょうは登場人物だと思います。」

この意見によって、教室には大きな「納得」がもたらされました。

みんながよく知っている物語の例を引用し、非常に分かりやすい説明を加えた菊池君のおかげで議論は一気に活性化します。

「確かにトイストーリーもそうだよな。」

「スイミーも魚しか出てきてないし。」

「機関車トーマスなんか電車だらけ！」

そこで、登場人物の定義を改めて教えました。

登場人物・・・物語の中で、人間と同じように考えたり行動したりする人や物や動物。

これで、子どもたちは一つ目の「ものさし」を獲得したことになります。

同じように、今日は「主役」について教えました。

最初に考える素材として提示したのは、「ドラえもん」です。

次のことを聞きました。

主役はドラえもんですか。それとものび太ですか。

面白いことに、教室の意見はこれまた半々に分られました。

主役とは、どんな登場人物ですか。

「一番目立っている人。」

「セリフが多い登場人物。」

「最初から出ている人。」

色々意見は出てきますが、ハッキリとした答えは知らないようです。

そこで、主役の定義を教えました。

主役・・・物語の最初と最後で考えや行動が大きく変わる登場人物。

これを教えた時点で、「わかったー！！」という声が何度も聞こえてきました。

イメージをクリアに持たせるために、ドラえもんの話を一つ紹介しました。

「独裁スイッチ」というヒミツ道具の回です。

あらすじを紹介します。

いつものようにジャイアンにいじめられて泣いて帰ってきたのび太。「ジャイアンさえいなければ…」と言いはじめるのび太に、ドラえもんは「この道具で邪魔者は消してしまえ。住み心地の良い世界にしようじゃないか」と言いながら「どくさいスイッチ」を取り出す。このスイッチは、気に入らない人をこの世から消せる道具だった。

道具を受け取ったものの、のび太は「いくら憎いとは言っても、消しちゃうのは可哀そうだよ」と思い、どくさいスイッチを使用することに躊躇する。しかしジャイアンと遭遇して

しまい、「さっきの続きだ！」と言いながら殴りかかってきた為、のび太は自分の身を守る為にどくさいスイッチを使用し、ジャイアンを消してしまう。

その後、のび太は「大変なことをしてしまった」と後悔する。そこにしずかちゃんがやって来て、「何があったの？」を尋ねられたのび太は「ジャイアンを消してしまった」と言うが、彼女は「ジャイアン？誰のこと？」と言う。のび太は慌ててジャイアンのことを説明するが、しずかはまるでジャイアンのことを知らないという。その後、先生が歩いて来てのび太はジャイアンのことを話すも、やはり彼も「そんな子はクラスにいないし、今までいたことが無い」と言う。そこでのび太は剛田家へ行き、ジャイアンの母ちゃんにも質問するが、やはり「そんな子はうちにいない」と言われてしまう。ここで、ジャイアンの存在そのものが消えてしまったことをのび太は知る。

すると今度はスネ夫がやって来て、先程までのジャイアンのようにのび太を追いかけ回す。そして、のび太はまた自分の身を守る為にどくさいスイッチを使用し、スネ夫を消し去ってしまう。これ以上、スイッチを使うのはまずいと考えたのび太は大慌てで自宅へ戻り、ドラえもん相談する。しかし、ドラえもんは「消えた2人を元に戻して欲しい？無理だよ。これは手品じゃないんだ。2人のことは忘れるんだね」と言う。のび太は「恐ろしい道具だ。カッとなるとつい押したくなっちゃうよ」と考えていると、いつの間にか昼寝をしてしまう。そして、のび太は夢の中でしずかやママからバカにされ、挙句の果てにはドラえもんからも馬鹿にされる。のび太は悪夢にうなされながら「誰もかれも消えちゃえ！」と叫び、うっかりどくさいスイッチを押してしまう。直後、のび太は目を覚ますのだが、家の中が不気味な程に静かになっていた。外に飛び出したのび太は他の家に呼び掛け回るのだが、誰も顔を出さない。「タケコプター」で空を飛んで確認しても、やはり町には誰もいない。のび太は自分が全人類を消し去ってしまったことに気付く。

のび太は、1人であることに孤独を感じるようになっていく。夜になると電気が止まってしまい、家の中はもちろん町も真っ暗になってしまう。のび太は暗闇の中で絶望し、「ジャイアンでも良いから出てきてよ…」と呟く。すると「気にいらぬからと言って次々に消していけば、こんなことになっちゃうんだよ。分かった？」という声が響く。そこにはドラえもんが立っており、彼はのび太に「実はこの道具、独裁者を懲らしめる為の発明だったんだ」と説明しつつ、消えてしまった人類を元に戻した。

後日、ドラえもんはのび太を連れて野球の練習を始める。ジャイアンとスネ夫がのび太を冷やかすのだが、それを聞いたのび太は「周りがうるさいってことは楽しいことだね」と言い、その様子を見たドラえもんは優しく微笑むのだった。

子どもたちは、しーんと集中して聞き入っていました。
話を終えてから、聞きました。

主役はどっち？

全員、「のび太です。」と口を揃えました。
その通り。

『ドラえもん』のお話の主役は、のび太なのです。
では、ドラえもんは一体どういう登場人物なのか。
次のことも教えました。

対役・・・主役の考えや行動を大きく変える登場人物。

主役の変化や成長を促すきっかけを作るのが、対役です。

子どもたちは、ここまでを聞いてとても納得した様子でした。



すかさず「てことは、主役が豆太で、対役がじさまか。」と去年3年生で学んだ「もちもちの木」についての呟きを発し始める子たちも。

見事に正解です。

これも、子どもたちの中に、「主役はこういうもの」、「対役はこういうもの」という解釈のものさしが入った証拠です。

こうやって、解釈の手掛かりとなるものを増やしていくことで、物語の読みは激変していきます。

授業の終わりに、次のことも尋ねてみました。

このクラスの主役は誰ですか？

「オレオレ!」「私たちです!」と子どもたち。

そのあと、すかさず野崎君が言いました。

「じゃあ、先生は対役だ!」

みんなの変化や成長のきっかけたる対役になれるよう、これからも精進してまいります。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

